

(独立行政法人教員研修センター委嘱事業)  
教員研修モデルカリキュラム開発プログラム

報 告 書

プログラム名	実効性と継続性の高い図画工作科教員研修モデルの開発 ー学校現場に則した研修内容の最適化と学習環境整備スキルの向上ー
プログラムの特徴	<p>1：実技科目の中でも小学校教員の多くが苦手意識を持つ図画工作科の指導・評価法等の研修について、実際に教員が働く小学校の地域性や教育課題を事前に調査し、基礎的な教材研究の最適化に向けて大学と小学校教員が協働して取組む。この過程で大学と学校現場の相互理解も深まり、学校現場を重視した現代的教育課題の抽出と共有が可能となる。</p> <p>2：図工室を中心とした学習環境について、必要な備品や教材の整備を協働して行い、その活用法を学ぶことで学習環境整備スキルの向上を図る。これによって、日常的な自立的研修を行う視点の獲得と課題の改善に向けた教育意識の育成を目指す。</p> <p>3：研修内容を反映した授業計画を練り、小学校教員による授業実践の状況を観察することで、研修内容の目標達成度を具体的な知識や技術の側面から検証する。早期の具体的検証によって、研修内容の適切な評価と研修課題の改善といったPDCAサイクルへの確立が見込まれる。</p> <p>4：一度整備した学習環境や教員の意識は、一定間隔の研修を継続することで持続可能なため、本事業において開発した教員研修モデルを近隣の小学校に巡回させることで、地域全体に普及させることが可能となる。</p> <p>5：開発した研修モデルは実践数の増加に伴い汎用性が拡大し、実践データの蓄積によって実効性が高まるだけでなく、調査や最適化に係る負担の軽減が可能となり継続性を保証できる。さらに教材集として冊子にまとめて配布したり、ホームページを介して発信することで、全国への波及が期待できる。</p>

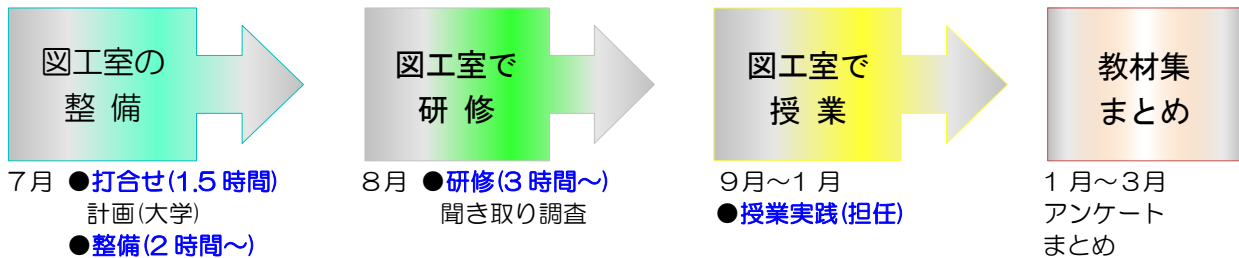
平成 26 年 3 月 31 日

機関名 国立大学法人 福岡教育大学

連携先 宗像市教育委員会・福津市教育委員会

# プログラムの全体概要

## 実効性と継続性の高い 図画工作科 教員研修モデルの開発 —学校現場に則した研修内容の最適化と学習環境整備スキルの向上—



- 図工科本来の教育内容と学習環境を児童に提供
- 図工室を活用することのできる教育実践力を向上
- 学習環境の整備に係る課題発見・解決能力を育成



- 学校現場での自律的研修
- 学び続ける教員像

# I 開発の目的・方法・組織

---

## はじめに（開発の背景）

既存の教員研修では各学校から集まった教員等、40名を超える受講者を対象とすることがほとんどで、大学や教育センター内の大教室における一斉指導の形式を採っている。その為、研修内容を各学校での実践的な授業内容へ展開するためには、各小学校教員が学校やクラスの現状に則した内容へ再構成することが必要で、研修後の教材研究に伴う小学校教員の負担が大きい。教員の生涯学習としての役割や普遍的な教科内容の理解としては一定の成果が見られるものの、図工科の授業を通じた児童の教育へ直接的に反映させることを目的とした場合、最終的には教員の熱意や意欲に左右されることとなる。

また、本学が進める概算要求特別経費プロジェクト「実技教育支援コーディネーターの養成と配置効果の科学的検証」（平成23-25年度）において図工室の著しい学習環境の劣化が確認されており、本来であれば指導と一体化して行われるべき学習環境の整備が不完全であることが判明した。これは教室移動の煩雑さや機材・用具の管理ならびに準備・片付けの負担に対する教員の負の意識と現実的な時間不足が大きな要因であり、環境整備の責務が学年ごとに分断され易い小学校現場では、長期的な視点に立った学習環境整備スキルの修得と向上は困難であった。このことが小学校教員の図工科に係る教育意欲の減退と図工室を中心とした学習環境の劣化を進行させており、図工科本来の教育内容と学習環境を児童に提供することが、学校現場の緊急な課題となっている。

現行のプロジェクトでは、専科教員（実技教育支援コーディネーター）を配置することで、教員のチームティーティング（TT）体制を進め、これらの問題の解消とより豊かな感性教育を実践できると仮定して、その成果の実証を試みており、研究の成果は教育委員会ならびに文部科学省に提言することを計画している。

しかし、専科教員を配置しない現状の教育体制における現実的解決策の一つとして、それぞれの学校現場では異なった教育的課題が存在し図工室等の学習環境も異なっていることから、それらに最適化した教員研修モデルの開発が必要不可欠であり、各学校現場における学習環境整備スキルの向上と、最適化された研修内容の実践が効果的であることも分かってきた。

そこで、小学校現場との連携によって顕在化した図工科における現代的教育課題に対応すべく教育委員会と協議を重ね、「学校現場に則した研修内容の最適化と学習環境整備スキルの向上」という新規性と具体性の高い手法によって、「実効性と継続性の高い図画工作科教員研修モデルの開発」を目的とする本事業の着想と計画に至った。

福岡教育大学では、すでに現行のプロジェクトにおいて高く評価された単元やTT体制における教材研究の事例等を基に、学校現場の声を反映した研修内容の作成を開始した。また、職員室や図工室、各教室だけでなく廊下やオープンスペース等の学習環境についても、その整備計画を立案し、学校の年間行事に則して実践を始めた。

本事業は、恒常的に学びを継続することの出来る“理想的な教員像”を目指す教員各自の意識向上に加えて、児童とともに学ぶことのできる“場”の創造に繋がるものであり、教育系大学の地域貢献モデルならびに教員研修モデルとしての波及効果も期待できるものである。

## 1 開発の目的

学校現場に則した研修内容の最適化を協働して行い、担任教諭の負担を軽減するとともに、学習環境整備スキルの修得を融合した実効性の高い研修モデルの開発によって、図工科本来の教育内容と学習環境を児童に提供することが学校現場の緊急な課題となっている。

本事業は、事前調査に基づいた研修内容の最適化と学習環境の整備を協働で進める点で教員研修の新規性が高く、自律的な学びを継続することのできる理想的な小学校教員を目指して、実効性と継続性の高い図工科教員研修モデルカリキュラムを開発するものである。

教員は、開発した研修モデルを受講することで、事前調査によって顕在化した学校現場の現状を把握しつつ、各単元を学校現場に則して最適化することのできる授業創造力の向上を目指す。さらに、学校現場における学習環境の課題発見能力の育成が可能となり、その具体的な解決法を大学と協働する過程において、学習環境整備スキルを修得する。また、学校現場に最適化した具体的かつ実効的な研修内容によって、研修成果を授業に反映することが容易となり、研修成果を早期に体感し検証できることから、図工科の指導に対する不安が解消され、継続的な学習サイクルの構築に向けた教育意欲の向上が期待できる。

本研修モデルは身近な学校現場を舞台とした具体的かつ継続的な体験を融合したものであり、日常的な学習環境に課題を発見する多様な視点を育て、実際に改善する意欲と技能を高めることから、他教科への波及効果も期待できるものとなる。

本プログラム開発による研究成果と各学校での学習環境整備の具体的な事例等は、教材集の配布等によって広く教育現場に還元する。

## 2 開発の方法

本事業では、事前に研修場所となる学校の教育的課題を把握するため、図工室等の学習環境の現状や既に児童が習得した図工科の単元内容を調査し判断することから始めた。事前調査に基づいた研修内容の最適化と学習環境の整備を大学が主導しながら各学校と協働する点が本開発プログラム最大の特徴である。また、研修後の授業実践において研修内容を評価しPDCAサイクルへ繋げる点において、既存の研修制度を高度化した内容となっている。

大学は、これまでの実績を基に図画・工作各領域の基礎的教材研究の多様化を図り、学校現場に応じた最適化を主導した。教育委員会は、既存の公開講座やセンターを利用した教員研修とは別に各学校現場での研修機会を保証し、研修制度の継続と恒常化に向けて協議を進める。

開発した研修モデルは実践数の増加に伴い汎用性が拡大し実効性が高まるだけでなく、調査や最適化に係る負担の軽減が可能となり継続性を保証できるものとなる。

### (1) 研修対象

- ・宗像市教育委員会・福津市教育委員会の各教委が所管する小学校6校。
- ・小学校の教諭を中心に講師，管理職，職員全てを対象とする。
- ・研修をおこなう学校の希望を優先するが，図工室での研修状況として効果的と考える20名以内の受講者数を想定。

## (2) 研修日程

時期等	内 容	目 的
6月	研修実施校の現状調査 …研修希望内容を踏まえて、学校現場の学習環境や単元の進行状況等を調査 (現地調査参加者) 大学教員、小学校管理職、担任教諭等	研修内容の最適化に向けて課題を調査し計画を作成 学校の地域性や教育的課題を聞き取り、学習環境の調査とともに児童や教員に必要な研修内容について検討
7月 8月	研修内容の最適化・学習環境の整備計画作成 学習環境の整備 (整備計画・整備実践参加者) 大学教員、小学校管理職、担任教諭等 研修会の実践(各校、1日) (講師等)研修内容を専門とする大学教員	学習環境の整備を協働して行い、問題解決能力を向上  学習環境の整備によって学習内容が向上することや教科書の単元を学校現場にに応じて最適化する意義を理解
9月 ～ 12月	研修内容の検証① 聞き取り調査 研修内容の検証② 授業実践 (授業実践者)小学校担任教諭 (調査・助言者)大学教員	研修の成果がどのように指導に反映されたかを調査し、研修内容の改善点を抽出
12月 ～ 2月	環境整備のまとめ …研修内容以外の単元にも対応可能な環境整備を協働して実施 (整備計画・整備実践参加者) 大学教員、小学校管理職、担任教諭等	抽出された改善点の解決策を練り、継続可能な内容へと誘導
3月	協議会における総括 (協議会参加者) 各教育委員会担当者、事業代表大学教員	研修モデルとして事例をまとめ県内・全国へと発信

## (3) 研修カリキュラムの評価・改善

本事業の特徴でも示したように、研修を受けた小学校教員は研修内容を反映した授業計画を大学教員と協働して作成し実践した。研修後の早い段階で、実際の授業として実践することで、小学校教員は研修の成果を早期に体感することができた。また、授業実践の状況を評価することで、授業実践教員のさらなる教育実践力の向上に向けた課題の抽出が可能となるが、本事業で開発した研修モデルの評価についても、知識や技術の側面から客観的に研修目標の修得度を検証することが可能となり、研修モデルの具体的な改善を盛り込んだPDCAサイクルの確立を目指す。

本事業では、特徴の異なる6校での研修機会を設けており、それぞれの学校に則した研修内容の最適化と学習環境整備スキルの向上における行程は、授業実践における検証を含めて連携する教育委員会所管地域の各学校に共通する内容を展開することが可能となる。教員が修得し向上化した学習環境整備スキルとその教育意欲等は、実際に整備された学習環境と同様に一定間隔の研修を計画することで持続可能なため、同じ学校で繰り返す必要性は低く、本事業において開発し

た研修モデルを近隣の小学校に巡回させる等、既存の研修体系に組み込み地域全体に普及させることを予定している。また、本事業の研究成果は、教材集として教育委員会所管の各学校に配布した。教育関係者からの客観的評価を受けることで改善を繰り返しながら全国へ波及することが期待できる。

教育委員会とは、本事業の成果を通常の研修体系に組み込むことを前提に協議を進めており、経費の予算化など具体的な方策をまとめる。

### 3 開発組織

#### (1) 申請にあたっての連携状況

福岡教育大学と宗像市は、平成13年4月に連携協力事業の遂行に係る協定を締結した。同様に、福津市教育委員会とは、平成19年7月連携協力協定を締結している。

また、平成21年度に本学担当理事を会長とした「宗像市教育委員会、福津市教育委員会及び宗像地区小・中学校と福岡教育大学との連携事業連絡協議会」を発足させ、年数回の定例会を実施してきた。その内容は、研修をはじめそれぞれが抱える教育的課題を協働で解決していこうとするものであり、宗像地区の教育振興を図るため、各教育関係者が地区の特性の良さに目を向けて相互の関係を強め、福岡教育大学と宗像・福津両市教育委員会及び管下小・中学校との互いの機能を強化、補完することを目的とした「宗像地区教育関係者合同研修会」を継続して共催している。

現在、連携中のプロジェクトとしては、平成23-25年度概算要求特別経費プロジェクト（文部科学省）『実技教育支援コーディネーターの養成と配置効果の科学的検証 一 図画工作・音楽・書写の「実践知」習得を基盤とした「潜在的カリキュラム」の開発一』を協働して進めている。

平成24年度は、感性教育を担う図画工作科、音楽科、国語科（書写）の実技的側面に関する実践的検証として、「実技教育支援コーディネーター」を研究拠点校となる3つの小学校に配置するにあたって、年間を通じた配置に係る給与体系や勤務体系等の課題を解決して、研究成果の集約と検証を行なっている。事業で設定しているプロジェクト協議会は、大学担当理事・副理事、教育委員会担当者と研究拠点校の学校長・教頭、大学担当教員・事務職員等で構成されており、定期的な実務的な協議を行なうとともに、「宗像市教育委員会、福津市教育委員会及び宗像地区小・中学校と福岡教育大学との連携事業連絡協議会」において報告し、今後の研究内容について協議を重ねている。

今回申請する事業内容は、現行のプロジェクトを遂行する中で学校現場の声として抽出された現代的な教育課題の解決をテーマとしており、教育大学と教育委員会、各学校との相互理解を深め、連携の強化によって具体的な教育課題を発見し解決するための連携組織は順調に機能している。

本申請事業については、「宗像市教育委員会、福津市教育委員会及び宗像地区小・中学校と福岡教育大学との連携事業連絡協議会」において協議した後、各教育委員会の了承を得て申請に至ったものである。各教育委員会だけでなく、小・中学校校長会を代表する各委員からも、学校現場の学習環境の改善と融合した教員研修モデルの実践に期待されている。

## (2) 組織体制

教員研修モデルカリキュラムの開発にあたり、連携事業連絡協議会を中心とした大学と教育委員会の連携体制を確認するとともに、研修実施校の現状を踏まえた研修方式や研修内容を検討するために、以下のような組織体制で取り組んだ。

大学教員は、4月から着任した図画工作科・美術科教科教育担当教員と図画（絵画）領域を専門とする教員が研究を統括するとともに、研修実施校の要望を踏まえた研修内容に即して、その専門性を有する研修実践担当教員を選出して研修に当たった。他の教員は、研修内容を共有してそれぞれの専門性を活かした教材の最適化を図り、教材集の作成に当たった。

### ■福岡教育大学、宗像市教育委員会・福津市教育委員会

No	所属・職名	氏名	担当・役割
1	福岡教育大学・理事	黒見 義正	連携事業連絡協議会会長・事業の総括
2	宗像市教育委員会 ・教育政策課長	安部 武彦	連携事業連絡協議会委員・事業の継続化に向けた調整等
3	福津市教育委員会 ・教育総務課長	溝辺 秀成	連携事業連絡協議会委員・事業の継続化に向けた調整等
4	福岡教育大学・事務局 次長兼連携推進課長	三宅 信隆	連携事業連絡協議会委員、事業事務局・事業の調整等
5	福岡教育大学・講師	笹原 浩仁	研究代表
6	福岡教育大学・准教授	松久 公嗣	連携事業分科会の進行、図画・工作及び鑑賞領域の教材研究、研修の最適化と指導、教材集の執筆・編集
7	福岡教育大学・教授	阿部 守	研究実践・工作領域の教材研究、研修の最適化と指導、教材集の執筆
8	福岡教育大学・教授	千本木 直行	
9	福岡教育大学・准教授	加藤 隆之	
10	福岡教育大学・教授	篠原 利朗	研究実践・教科専門の立場から教材研究・助言 教材集の執筆
11	福岡教育大学・教授	宮田 洋平	
12	福岡教育大学・准教授	草尾 和之	
13	福岡教育大学・講師	本田 代志子	
14	宗像市教育委員会 ・指導主事	正路 澄代	教育委員会連携担当・連携に関する調整等
15	福津市教育委員会 ・参事兼主任指導主事	白木 照久	教育委員会連携担当・連携に関する調整等
16	福岡教育大学 ・連携推進課主査	久保 憲史	事業事務局・申請窓口、連携に関する調整等
17	福岡教育大学 ・連携推進課主査	川崎 由紀江	事業事務局・申請窓口、連携に関する調整等

■研修実施校（宗像市：4校，福津市：2校）

No	小学校名	教員総数	職・氏名（担当学年）	担当・役割
1	宗像市立 赤間小学校	51名	教頭・江崎美那子 教諭・次郎丸晶子（3年） 他，教諭・講師 17名 （参加総数：19名）	連携窓口 授業実践
2	宗像市立 日の里西小学校	25名	教頭・横川哲朗 主幹・中野壽三 講師・安部眞理子（5年） 他，教諭・学支援 9名 （参加総数：9名）	連携窓口，授業実践
3	宗像市立 玄海小学校	13名	校長・坂田紳一 教頭・有馬昌一郎 主幹・藤周作 教諭・大久保三佳乃（3年） 他，教諭・講師 2名 （参加総数：6名）	連携窓口 授業実践
4	宗像市立 大島小学校	9名	校長・水崎浩克 教頭・鎌田隆徳 教諭・松木大輔 教諭・伊藤桃子 他，教諭 5名 （参加総数：9名）	連携窓口 授業実践 授業実践
5	福津市立 津屋崎小学校	29名	校長・吉田善仁 教頭・木庭竜之助 主幹・木下美紀 教諭・石津安信（4年） 他，教諭・講師 25名 （参加総数：29名）	連携窓口 授業実践
6	福津市立 勝浦小学校	9名	校長・矢野明弘 教頭・薄俊哉 主幹・太田剛 教諭・吉田智子（1年） 他，教諭 5 （参加総数：9名）	連携窓口 授業実践

※福津市立津屋崎小学校・福津市立勝浦小学校は，福津市教育委員会の方針で，今年度夏期一般研修として実施することから，原則全員参加の体制をとることとなった。



## Ⅱ 開発の実際とその成果

### 1 研修に係る連携協議会の記録

6月以降の研修に備えて各教育委員会連携担当者と研究代表による連絡協議会を設置し、研修実施校の選定に向けた日程を設定した。各市の校長会において事業内容を説明し、研修実施校を募った。また、研修実施校には以下の条件を設けた。

- 1：研修の参加者は担任教諭を含む教職員とし、管理職や講師等を含めても良い。
- 2：応募するに当たっては、学校規模に準じた最低参加者数を設定する。
  - 1学年1クラス規模・・・3名以上
  - 1学年2クラス規模・・・5名以上
  - 1学年3クラス以上・・・7名以上 ※原則として20名程度まで
- 3：調査・協議・研修に複数の参加者が協力できること。
- 4：研修参加者の内、1名以上の担任教諭が授業実践を行うこと。
- 5：参加者全員がアンケート調査に協力すること。

年月日	実施内容	実施状況
2013.4.10	本事業に関する教育委員会との連絡会 (宗像市教育委員会) (福津市教育委員会)	本事業の採択を受けて、4月の人事異動に関連した組織及び担当者の確認と、研修に係る日程の調整を行う。また、本事業終了後の継続的な研修の体系化について協議した。
2013.4.12	宗像市小学校校長会での事業説明会	研修実施希望校の募集に関して、校長会において本事業の説明を行う。翌日、応募様式(案)を教育委員会担当者に提示し、修正を加えて各小学校に送付された。
2013.4.22	福津市小学校校長会での事業説明会	研修実施希望校の募集に関して、校長会において本事業の説明を行う。応募様式(案)は事前に教育委員会担当者に提示し、説明時に配布された。
2013.5.9	研修実施校選考会(福津市教育委員会)	研修実施希望校の応募を受けて教育委員会担当者と協議のうえ、実践校を決定した。
2013.5.13	研修実施校選考会(宗像市教育委員会)	研修実施希望校の応募を受けて教育委員会担当者と協議のうえ、実践校を決定した。 希望校4校に対し採択予定校は2校であるが、教育委員会からの要望を踏まえ、減額対応で4校を採択することとした。
2013.5.30	本事業に関する教育委員会との連絡会	決定した実践校について確認し、今後の計画について協議した。

応募された小学校には研究代表者が説明に伺い、事業内容を再確認して選考に当たった。希望校が多く、教育委員会の意向を踏まえて、当初予算の減額対応で6校を採択した。

## 2 各研修実施校での研修報告

(1) 宗像市立赤間小学校を中心に 【大学担当教員：松久公嗣（絵画）】

### ■研修のねらい

宗像市立赤間小学校では、平成22-23年度の専科教育プロジェクトにおいて、既に図工室整備と準備室の整備が進んでおり、その後も図工室を活用した授業展開がある程度なされている。備品・消耗品を確認したが、版画インキを共用で購入し常時管理している点や、版画用バレンを追加購入し、購入年度のシールを添付して数を管理するなど、一度整備された状況を継続して維持できている。他の小学校と比較して基礎的な図工室整備ができていることから、クラブ活動や地域貢献事業の課題にも対応可能な備品や画材の整備を進め、より高度な図工室の活用と図工科授業の展開を図ることとした。

図工室の状況に比例して、教員の図工に対する理解度も高く、食紅を使用した低学年での「色水あそび」から、高学年での「版画裏彩色」といった系統立てた教材研修を軸に据え、宗像市が進める小中一貫教育にも有効な色彩に関する研修を行うこととした。

これによって、小中一貫教育での小学校図工科の役割と「共通事項」の理解が深まり、より適切な図工科教育の実践が可能となる。

また、どの学校でも必ず指導する「木版画」について、彫刻刀を研ぐ研修を設けることとした。彫刻刀は購入後に4年程度使用することとなるが、1年で彫りの具合が悪くなる。彫刻刀研ぎ機を整備し、その使用法を習得することで、どのクラスでも適切な使用法と様々な技法を指導できるようになる。用具の扱い方や伝統的な文化芸術を理解する方策としても適していることから、今回の研修に採り入れることとした。

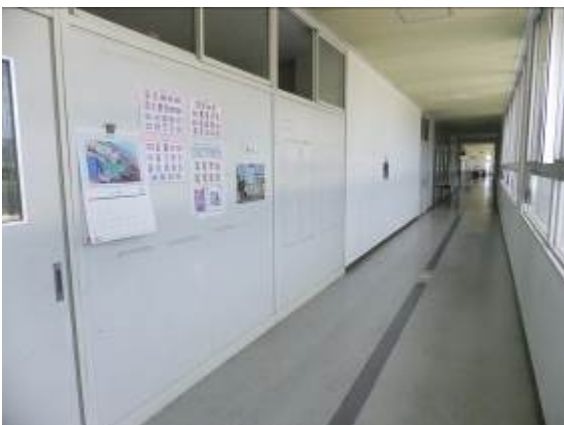
### ■日程など

(1) 図工室整備（協議）	7月22日（月）	9:00-10:30
(2) 図工室整備（整備）	7月29日（月）	9:00-11:00
	8月 5日（月）	9:00-10:30 ※追加
(3) 図工室での本研修	8月27日（火）	9:00-12:00
(4) 研究授業の実践	1月15日（水）	14:05-14:50（授業） 15:15-16:30（協議会）

### ■図工室整備（協議）

- ・切り出し小刀も良く切れる状態で管理されている。
- ・工作台の天板は5mm 厚合板を貼ってから6年が経過して、新たな傷が目立っているが裏返して貼り替えることで対応可能である。ただ、23年度に大学の廃棄機を移管した台については、天板の貼り替えもなく整備の必要がある。
- ・図工室机天板の張り替え 1. 182×87.2cm 2. 180×87.7cm  
3. 180×90cm（裏面が汚い場合の予備として）
- ・糸のこについても6台の糸のこが専用の台に固定されしっかりと管理されているが、振動が大きく、児童が押さえる必要があるなどの問題点が挙げられたので、防振・防音マットを設置することとした。

- 29日の図工室整備では、各学年から1名の先生が整備に参加するということもあり、天板の貼り替え、防振・防音マットの設置を中心に共同で整備にあたることとする。
- 箱いす・・・37脚有り、2脚は丸いす  
できれば同様の箱いすを3脚追加し揃えたい・・・(絵画2予備を移管)
- 研修で食紅の教材研究を希望されたので、食紅関係の画材を整備することとした。  
・・・関連してスポイトや容器の購入も必要となる。
- スクラッチ絵画を提案し興味を示されたので、蜜蝋ワックスを購入することとした。
- 他に、作品展示ホルダー、紙バンド等を整備する方向で計画することとした。
- 大学生が作成した参考作品や、他校の児童が作成した作品のコピーを展示するなど参考となる作品の展示を行う。
- 廊下に展示跡(テープ跡)が残っており、テープはがしスプレーで剥がすこととした。



■ 図工室整備（整備）

• 天板の貼り替え

以前の貼り替えで使われた板を裏返して使用したが、裏面の木目が荒く、パテ埋めで対応した。その為、さらに上からペンキを塗ることとなった。



釘で止めずにガムテープで4辺を押さえて固定する。



パテを十分に乾かしてから、舞台背景のようにいろいろな色を重ねながら、最終的には白に近い色になるようにする。

天板のきれいなものには、ペンキを塗らず、木の無垢な雰囲気を残した。

奥：ベニアのまま  
手前：ペンキ塗布





本研修で使用した際に、ベニヤのまま残した天板は食紅の細かな色が染みついたが、ペンキを塗布した天板は、容易に拭き取ることができた。これまでは板のまま使用するか、薄くニスで吹き上げて完成としていたが、ペンキを塗布することも有効であることが分かった。

また、真っ白に塗るのではなくペンキを重ねることで美しいマチエールを表した。この色彩的効果が、児童の創造力育成にどの程度有効かは今後の劣化状況や児童の使用の様子を確認したい。



ベニヤ無垢



ペンキ塗布



電動糸のご盤は、防振マットを敷いてからボルトで固定しなおした。他の学校で試行して、振動が大幅に減少することが確認されている。宗像市の小学校では、3年前までボルトの固定が外れているところも多くあり、使用しない児童が押さえながら制作している光景が見受けられた。



用具や絵の具は写真と個数をラベルにして貼り、児童でも一目で分かりやすくする工夫がなされた。

小学校では児童が制作した作品を全て返却してしまうため、参考作品が残りにくい。今回の整備では大学生が作成した参考作品や、児童に了承を得たものを図工室の後部壁面に展示した。学年や単元の名前を付けることで、何年生でどのようなことができるのか楽しみに待つ児童が増えた。また、新しい単元が始まる際に作品を指しながら、具体的な指示が出しやすくなった。

参考作品を展示することで、その作品を真似る児童が増えると思われがちであるが、これまでの経験上そのような心配は一切いらない。子どもたちは理屈でなく体験的・体感的に理解し、納得がゆくと豊かな表現活動を行い、自分だけの表現を模索することができる。

図工室に作品を展示することは、児童の豊かな感性を刺激するだけでなく、教員が自信を持って分かりやすく指導する時にも大きな支援となる。よく、印刷物の名画が色あせて展示されている場面を見るが、できれば画材や紙のテクスチャが視覚的にも認識できる、本物の作品を展示したい。

今回の環境整備では、研修に参加する教員が声を掛け合って、児童の作品を集めた。どの作品が適しているか考える中で、教員の図工的な思考がプラスに作用しているのがよく分かる。

また、単元名を付けるアイディアは、教諭の話し合いの中で提案されたもので、整備が進んだ図工室をより良い環境に改善しようとする教員の意欲が高まったことを示す好例である。





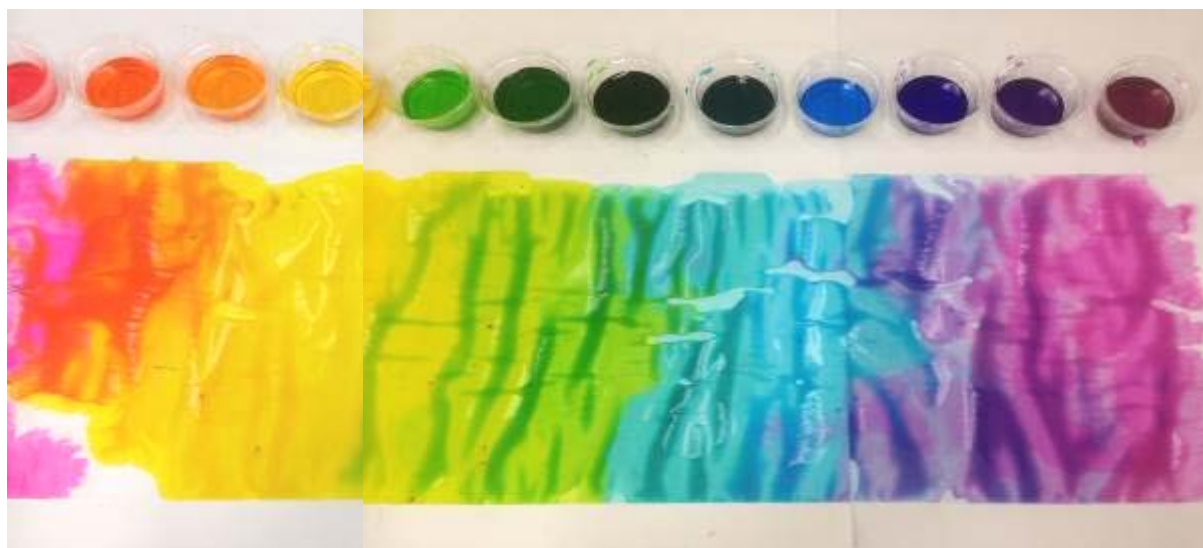
## ■教材の最適化

図工室の整備が終了するとともに、その場で有効な研修内容とその研修に有効な教材研究を進めた。今回は「食紅」を使った絵の活動について本研修を行うこととなり、現職教諭の求める内容に加えて、学校の特色や図工室の環境などに適した教材へと最適化を図った。

「食紅」を絵の具として活用することで、光を通した濁りのない色の混色あそびが可能となる。また、色の混色には相当薄めたものを使うが、一定の濃度で絵の具のように使用すると発色の良い共用絵の具として活用することができ、今までにない表現が可能となる。

最近、絵の具の混色を苦手とする児童が増えている。図工室を使用しない場合、教室の近くに洗い場があるとは限らず、あっても蛇口の数が少ない。その結果、教室で図工を完結させてしまう先生は、図工の時間に筆洗/バケツを使わなくて済むように絵の具をそのままの濃度で画面にぬらしている場合がある。3原色を中心に上手く混色することでいろいろな色が生まれることを、早い段階から経験させなければいけない。

さらに、低学年から始めることのできる色水あそびから、水分量を調節して意図した濃淡をつくる技能を習得させ、自由に混色できる技能とともに、自由な表現と豊かな感性を育てるための方策を、系統立てて解説できるように、最適化した用具と材料を準備した。



食紅を専門の業者から大量に購入して色水あそびに活用したり、発色の良い染料系の絵の具として使うアイデアは、昨年度まで小学校で教鞭を執っていた、本研究代表の笹原の教材研究を基にしている。これまでの実践から、水と食紅の分量や保存方法、利活用場面の蓄積は充分に行われているが、本事業ではこの教材研究を基に対象となる学校現場や児童の様子に合わせて最適化して提案することが肝心である。

まずはこれまで通りに工夫された準備段階を経て、一般的な研修内容を設定する。絵画を専門とする松久が担当する宗像市立赤間小学校ならびに宗像市立玄海小学校からは、秋の児童画展に対する指導方法と審査の観点について学びたいという要望も寄せられていた。



そこで、食紅絵の具を活用した「鯉のぼり」を作る内容と、「木版画」の裏彩色技法を学ぶ笹原考案の単元を軸に研修の構想を立てた。

さらに、赤間小学校では冬の時期に近くの街道や寺社で行われる「夢灯籠祭り」に竹と和紙で作成した竹灯籠を展示している。これは授業とは別にクラブ活動において作成するものであるが、明かりを灯して魅力的でありながら、近隣のコミュニティセンターに昼間展示しても魅力的なものということで、いつも頭を悩ましているということであった。市販されている蝋を溶かして透明な絵の具とし、障子紙に描画すると「パチック」の技法と同様に透明絵の具で描いた部分は食紅絵の具をはじいて透明なまま残り、発色良く描かれた部分も明かりを通して美しい色彩を放つ。



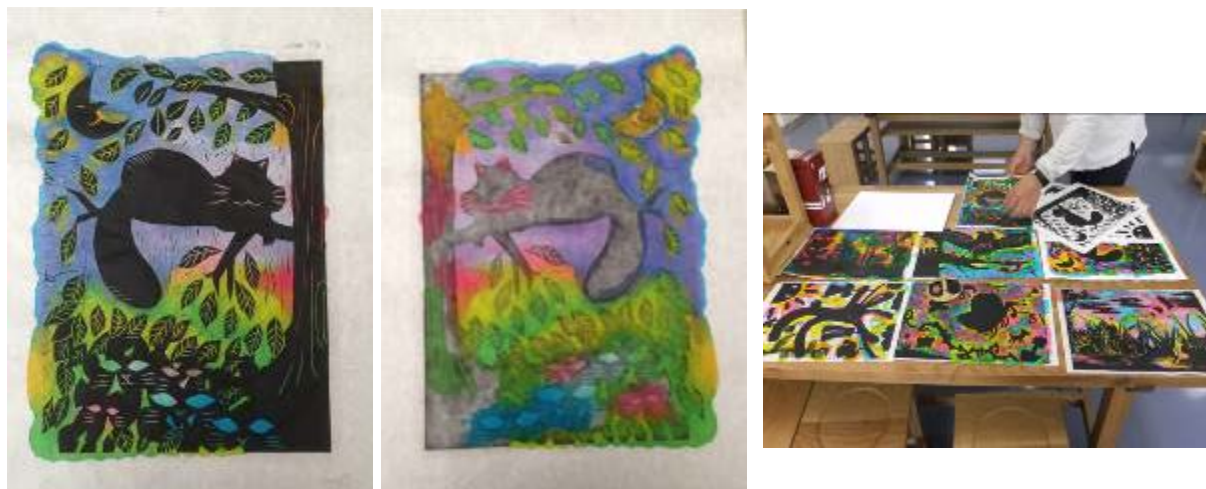
これらの笹原の先行研究を基に、小学校の学年に沿って発達課程に即して展開することのできる研修内容に最適化して、食紅絵の具の教材としての魅力を伝えるものとする事とした。





裏彩色技法では、表の墨版を活かした彩色が重要となる。本来であれば版画の制作だけで研修が終わってしまうところを、大学生が制作した版を借りて大量に墨版を作成し、この墨版に思い思いの色を着色する方法をとった。限られた時間で効果的な研修とすること、食紅絵の具を用いた単元を系統立てて習得することを重視しての判断である。

食紅絵の具は、筆にたっぷり絵の具を含ませて画面の中で色が混じり合うように描いていくのがコツとなる。はじめの1・2枚は、繊細に表現しようとしてたっぷりとした絵の具の置き方が分からないようであったが、3枚4枚と数を重ねることで、コツをつかんでいく様子を確認できた。小学校の現場では、刷る手間を考慮して1・2枚の作品を大切に完成させることが多いが、このような研修を体験することで、単元の目的や画材の特徴にあわせた柔軟な指導の必要性和、自ら体験することの大切さを感じてもらえたようである。



灯籠の制作では、溶かした蝋を筆に含ませて模様や図柄を描くことから始めた。灯籠に適した一定の強度を持つ和紙を探し、ホームセンターで安価で手に入る障子紙を選択した。今後も継続して活動を行う場合、安価で購入できるものを選択するのは重要である。

蝋を溶かすには、写真では電熱器を用いているが、研修では家庭科室にあるホットプレートあるいはガスカセットコンロを用いることとした。すでに学校現場に備品として整備されているものを活用し、やけどの恐れも少ない安全な器具を使用することとした。



蝋で描いた部分は、より光を通すハイライトの役割を果たす。

## ■ 図工室での本研修

- 1：彫刻刀研ぎのミニレクチャー（20分）
- 2：食紅の使用法（30分）
- 3：色水遊び（30分）
- 4：色水遊びから絵の具の混色につなげる（10分）

休憩（10分）

- 5：版画の裏彩色（30分）
- 6：5年生が行う「夢灯籠」に活用可能な、  
蝋と食紅を使った模様描き（30分）
- 7：その他、鯉のぼりなどの紹介（20分）

計3時間

### 準備するもの

- ・食紅（紅・黄・青）250g缶 各1
- ・プラスチック容器  
児童用（図工室整備品を使用）、展示用（研修後移管）
- ・スポット（図工室整備品を使用）
- ・食紅溶剤管理容器（研修後移管）
- ・デジタルはかり      ・さじ
- ・障子紙（多めに購入し、研修後移管）
- ・版画用紙      ・版画見本（参考作品など）
- ・蝋（多めに購入し、研修後移管）
- ・鍋      ・電熱器      ・筆（蝋用）      ・筆（食紅用）
- ・鯉のぼり用材料一式、参考作品
- ・彫刻刀いろいろ
- ・灯籠参考作品



彫刻刀研ぎの実践





研修者は、みな童心に返ったように活動に没頭していた。図工科の教材研究は本来こうあるべきである。楽しさや感動は教員の態度や表情となって児童にも伝わるものである。また、もともと図工の指導に苦手意識を持っていた教員も「これでいいんだ！」と理解し集中出来ていた。

終了後の感想としては、時間が経つのが早く感じたようである。実際に、もう少し活動を延長したいという申し出があり、予定時間を20分ほど延長して研修を継続した。



竹を用いた灯籠づくりも問題なく終了できた。この絵の具を用いることで、昼間に明るいところで見ても魅力的で、夜に明かりが灯ることでさらに魅力の増す灯籠づくりが可能となった。



作成した紙をくるっと巻き、テープで仮止めすることで簡単に完成することができる。



### 3 研究授業の実践

ここでは、大学との連携や研修で得た教育実践力を評価することを前提に、食紅絵の具を使った授業実践について考察を深める。今回のプロジェクトでは、学校行事との兼ね合いから研修で主体的に学んだ内容をそのまま授業として実践できた例は少なかった。そこで、小中一貫教育を想定した研究授業で実践された内容を合わせて提示し研究授業の実践のあり方を述べる。

単元名：『色水を使って』

- 本題材はいろみずを作るという素朴な活動の中で、3原色だけでも混ぜ方によって無限の色を作り出せることに体験的に気づき、自分の気持ちにあわせた色を作り出したり、様々な美しさを味わえる題材である。
- 子どもたちは、クーピーや色鉛筆を重ねて塗ったり、クレパスを画用紙の上でこすって混ぜ合わせたりなど、色を混ぜることに関心を持っている。第2学年『マグネット・マスコット』では、カラーねんどを使って活動を行い、色を混ぜることを楽しみさらに期待を高めている。しかし、第1学年、第2学年での絵の具を使った活動では、決められた絵の具を共同で使ったため、色を混ぜる活動は行っていない。絵の具のような液体状の材料での混色活動に関しては、その楽しさ自分だけの色を作る喜びを十分に味わえていないと言える。
- 本単元では、色を混ぜて自分だけの色を作る楽しさと喜びを体験させたい。本活動では食紅を溶いた水溶液を混ぜることによって混色を行い、3原色を使って様々な色が作れることを発見させ、自分だけの色作りを楽しむ。教科書には絵の具やインクを使った方法が記載されているが、混色の美しさや材料費の観点から食紅絵の具の水溶液を採用した。





## ■学習の流れ

### 第2学年3組 図画工作科学習指導案

#### 1 題材名 いろいろいろみず

#### 2 指導の構想

##### このような子どもから

- ・クーピーや色鉛筆を重ねて塗ったり、クレパスを画用紙の上でこすって混ぜ合わせたりするなど、色を混ぜることに興味をもっている子どもが多い。(造形への関心・意欲・態度)
- ・「マグネットマスコット」の学習において、赤色と青色を混ぜると紫色になることや、青色と黄色を混ぜると黄緑色になることを知り、色づくりをしているが、混ぜ合わせる分量の違いで様々な色ができることに気づいている子どもは少ない。(発想や構想の能力)
- ・3原色の紙粘土を使って、混色をつくることはできるが、混ぜる分量の違いを意識して色づくりができる子どもは少ない。(創造的な技能)
- ・ほとんどの子どもが、自分や友だちの作品のよさを見つけることはできるが、友達との感じ方の違いに気づいている子どもは少ない。(鑑賞の能力)

##### このような単元、題材で

本題材は、絵の具やインクを混ぜて色水をつくり、色の美しさやおもしろさを感じたり見つけたりしながら色づくりの楽しさを味わい、自分らしい表現の追求をすることをねらいとしている。

まずはじめに、3原色の色水から、自由に色を混ぜ、別の色ができることを体験したり、自分のつくった色や友達の作った色を見比べてその違いを楽しませたりする。次に、自分のお気に入りの色づくりをし、友達との交流を通して、作品のよさや感じ方の違いに気づかせたい。

##### 既習内容

- 1年 すきなもの いっぱい
- 2年 マグネットマスコット

##### 本単元で学習する内容

- 1年 いろいろいろみず

##### 発展内容

- 3年 水と絵の具のハーモニー

##### このような学習の流れで

総時数3時間

1 いろいろな色水をつくり、色を混ぜると別の色ができることを体験する。(2時間)

2 自分のお気に入りの色づくりをし、友達と見比べたり、よさを見つれたりする。(1時間)

(本時)

##### このように工夫して

##### 【既有知識や経験と比べる活動】

- 前時内容と本時内容の違いをつかませるために、掲示物や作品写真を使う。

##### 【自分の考えと比べる活動】

- 各班で、友達の作品と見比べ、よさを伝え合うことで、それぞれの表現のよさに気づく。

##### 【これまでの自分と

##### 学習後の自分を比べる活動】

- それぞれの学習の終わりに、全員で作品を鑑賞する時間をとる。

##### このような子どもに

- ・進んで色水をつくり、色の美しさやおもしろさを感じたり見つけたりしながら、色水づくりの楽しさを味わおうとすることができる。(造形への関心・意欲・態度)
- ・自分のつくりたい色水のイメージを持って、活動することができる。(発想や構想の能力)
- ・色の特徴をもとに集めたり、並べたり、混色したりするなど、工夫しながら活動することができる。(創造的な技能)
- ・自分や友達の活動を見合ったり、話し合ったりしながら、様々な色の違いや、友達との感じ方の違いに気づくことができる。(鑑賞の能力)

### 3 本時

○色の美しさやおもしろさを感じたり見つけたりしながら、お気に入りの色をつくる楽しさを味わおうとすることができる。(造形への関心・意欲・態度)

○自分や友だちの作品を鑑賞することを通して、作品のよさや友達との感じ方の違いに気づくことができる。(鑑賞の能力)

### 4 本時の流れ

段階	学習活動と内容	教師の支援	めざすこどもの姿
つかむ	<p>1. 学習のめあてと見通しについて話し合う。</p> <p><b>【既存知識や経験と比べる活動】</b> 前時につくった色水をもとに、学習の「めあて」を話し合う。</p> <p><b>めあて</b> 色をまぜて、お気に入りの「たからばこ」をつくろう。</p>	<p>※前時につくった色水の写真を確かめさせることで、自分の好きな色のイメージを持ちやすくさせる。</p>	<p>・前時につくった色水の写真を確認しながら、ふり返りをしている。</p>
つくる	<p>2. 自分が好きな色づくりをする。</p> <p>(1)お気に入りの色水をつくる。</p> <p>(2)お気に入りの色水に題名をつける。 「たのしい色」「わくわくする色」「うきうきする色」「さわやかな色」「春(夏・秋・冬)のような色」「海のような色」など</p> <p><b>【自分の考えと比べる活動】</b> (3)自他の作品を班で見比べ、自分の作品のよさや友達の作品のよさを見つける。 ・友達の作品のよさを見つけ、伝える。</p>	<p>※迷っている子どもには、前時にグループで作った色水の作品から、自分の好きな色がどれか、確認させる。</p> <p>※自分のお気に入りの色ができるまで、何度も挑戦してよいことを知らせ、安心して活動ができるようにする。</p> <p>※題名をつけることで、自分の好きな色のイメージをより具体的に持つことができるようにする。</p> <p>※できた色を友達と見比べることで、人によって感じ方が違うことに気づかせる。</p> <p>※1人ひとりの感じ方のよさを認める。</p>	<p>・自分の好きな色づくりに関心を持っている。</p> <p>・試したり、見つけたりしながら、工夫してつくっている。</p> <p>・自分や友だちのつくった色水の色に関心を持っている。</p> <p>・友だちの感想から、色に対する感じ方の違いに気づいている。</p> <p>・自分や友だちの作品のよさを感じている。</p>
まとめる	<p>3. 本時の学習をまとめる。</p> <p><b>まとめ</b> お気に入りの色をあつめた「たからばこ」を作り、色や並べ方から思いついた、だい名をつけることができた。</p> <p><b>【これまでの自分と学習後の自分を比べる活動】</b> 赤・青・黄の3つの色から、お気に入りの色を工夫してつくることができたことを実感する。</p>	<p>※出来上がった色水を全員で鑑賞する時間をとり、赤、青、黄の3原色だけでも混ぜ方によって、様々な色を作り出すことができることに気づかせる。</p>	<p>・興味を持って、友達の色水を鑑賞している。</p> <p>・3原色だけで、様々な色ができることの楽しさを感じている。</p>





担当教員は自らの感動体験に基づいて、児童の活動の様子を想像した適切な用具や絵の具を準備できていた。教員の感動体験は、その単元の最も重要視したい本質に合致することが多く、研修によって得た経験が活かされた学習環境の整備がなされていた。

また、窓際に置かれた色水は、限られた時間内に色水をふんだんに使用できる安心感を間接的に児童に与えるだけでなく、光を透過した色水の美しさを利用して空間を演出する効果を狙って設定されている。これにより、図工室はより創造的な空間に変化している。さらに、小中一貫教育の見通しを持って「色相環」が掲示されているが、中学の内容を前倒しに積み込む学習ではなく、美しい色の視覚的效果をねらった体験として利用されていることから、中学校美術科への繋がりを意識した適格な環境整備であることが分かる。

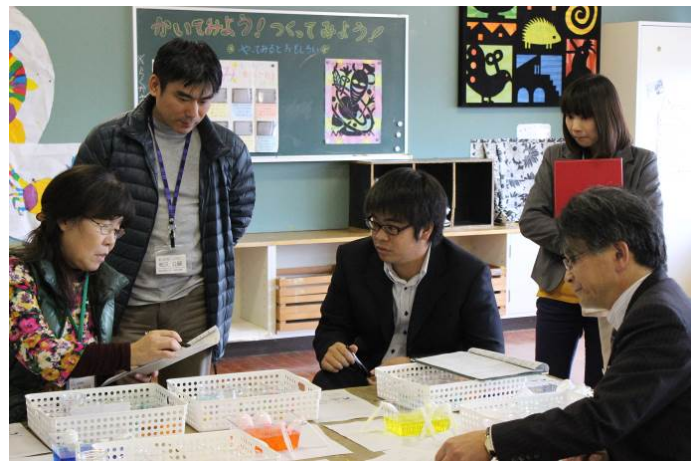
研修で提案した教材に加えて、担任教諭独自の工夫が随所に見られるこの研究授業は、環境整備を終えた時点で一定の学習内容を保証できるような、お手本となる授業であると評価できる。

この授業実践とは別に、下に示した画像はクラブ活動で制作された灯籠制作の例である。光を通した色彩が美しく、点灯時には児童から歓声が上がったと聞いている。昼間に展示されている状況でも図柄のデザインが美しく、十分に展示空間を彩っている。

これらのことから、本授業実践ならびにクラブ活動の実践内容を総合的に判断すると、本モデルカリキュラムの実践によって、図工室を活用するために必要な学習環境整備スキルは確実に向上しており、即効性のある研修プログラムとして機能していることが確認できた。



#### ■協議会での評価



授業終了後に時間を設け、自評ならびに参観者からの客観的な評価がなされた。研修内容を反映した授業内容と、用具の設定や参考作品の提示、鑑賞作品の展示といった図工室の環境整備において好評価を得た。十分に考察された内容と授業計画によって授業は適切に進められ、子どもたちは楽しく活動を展開することができていた。また、友だちを話しながら自他の作品を見せ合うなど、自然な鑑賞交流がなされており、活動プリントにまとめを記入するに当たっては、それぞれの児童がイメージした色を求めて、試行錯誤しながらも達成感を得ることのできた内容が示されていた。

参観者からも、広い共同空間を有する図工室を活用することで、色水を使ったグループ活動がスムーズに展開されており、グループ交流が活発であった点や、光を透過させることでより発色良く混色が可能となる食紅絵の具を使うことで、子どもの学習意欲が高まっていた点などが高く評価された。



## ■課題

今回の授業実践は、日常的なレベルの授業ではなく入念に準備された内容であった。他の教員の補助が必要な部分もあり、そういった側面から評価すると特別な授業になっていた感は否めない。しかし、本プログラムでは教員が自律的に課題を発見し解決する能力の養成と、その継続性を重視している。日常的に実践するのは困難でも、一度習得した方法論は図工だけでなく他の教科でも活用できる。今後はそういった感覚で他の教科にもあたり、より一層の教育実践力向上を目指してほしい。

また、参観者も図工室を活用した本単元に魅力と可能性を感じており、さらにデジタルテレビや実物投影機を用いて、他の児童の色水を視覚的に共有できるような発展的改善案も述べられた。

後述するアンケート調査にもあるように、図工室に移動することは時間的なリスクを伴う。今回の授業は他の時間との兼ね合いが上手くいっていたので好条件で実現できているが、日常の時間配分で同様の授業が展開できるとは限らない。図工室や教室を使った図工について、今一度メリットとデメリットを精査しつつ単元とのマッチングを検討していきたい。

## 4 教材集の作成

今回の研修で、整備された図工室や学校現場に最適化された単元を中心に、研修の様子を共有していた他の大学教員による教材案の提案を「教材集」としてまとめた。

申請当初は図画課題5課題、工作課題5課題、鑑賞課題5課題の15課題を事前教材研究として開発し、研修実施校や地域の特色を加味した最適化を4課題想定していたが、研修実施校が6校に増加したことに対応して、最終的には図画課題10課題、工作課題10課題、鑑賞課題5課題の25課題を、最適化された課題を含めて教材集にまとめることができた。

教材集はカラー刷りで冊子化し、宗像市教育委員会・福津市教育委員会所管の各小学校に勤務する管理職を含めた教員・講師全員に配布した（530部）。現職教員の感想は良好で、非常に分かりやすく参考になったとの感想をいただいている。

当初計画していた授業光景のDVD化については、研修実施校の増加に対応した予算の変更に伴い、次年度以降の研修機会に参考となる画像データとして編集することとした。また、本学美術教育講座では、平成26年度中の講座独自のホームページリニューアルを計画しており、本プロジェクトにおける成果はそのリニューアルに合わせてまとめ直し、全国に向けて発信することとした。

次頁以降に、本プロジェクトで実践した図工室整備の記録と、研修を基にした研究授業実践記録の一部を掲載する。また、研修ならびに授業実践の成果を反映した教材6件を参考事例として掲載している。書式としては冊子化を意図した頁構成に加えて、2～4頁構成とすることで、各単元を抜き刷りして本プロジェクトの継続的な研修会やその他の現職教員研修会で活用できるようにしている。

# 図工実践記録 2013 ①

図画工作科が危機的状況にある。授業時間の削減に加え、環境の維持管理が難しくなっている。図工を得意とするか、専科の教師が存在しないと、日本の小学校現場から図工室が消えてしまう。2013年夏休み、宗像市日の里西小学校でまず、図工室の整備に取り掛かった。今回は、この小学校に工作の内容が取り込める環境整備を目標とした。



① 図工室は、荒れ放題。物置と化しており、ほとんど使われていなかった。



② その中でも、目立つ存在の教室中央にある収納扉が暗い印象を与えると感じた。



③ 水性塗料を用意し、まずはマスキング。教師たちに塗り方の指導。作業に取り掛かった。



④ 塗装後は、見違えるほどきれいに。教室が明るくなった。やる気が大切。



⑤ 電動工具・基本的な工作工具・釘・接着剤・木材 などの工作に資する内容に必要なものを DIY ショップで買い揃え、教師たちに 2 日間にわたり、工作の基本技術指導を展開。



## 図工実践記録 2013 ②



小学校5年生としての図工科木工技術の学習を踏まえ、～「MUNAKATA ランド」を作ろう～をテーマとする制作。工作は、授業における環境整備と教師の授業に対する自信が決め手となる。億劫がらずにこどもの感性と素材の魅力を出会わせる工夫を心がけよう。  
きれいになった図工室での作業開始。  
2学期の図画工作室。こどもたちは、まっしぐらに素材と向き合った。素材との孤独な格闘も必要だ。



① それぞれのチーム毎にエリアの内容を決め、話し合いながら制作に入る。



② 宗像の街を観察し、話し合いながら木を素材にした。



③ 助け合いながら制作。



④ 日常、工作する機会に恵まれていない  
こどもたちも真剣。やればできる。



⑤ 工夫することができ、教室は工作音に  
包まれる。



⑥ 作業方法と加工しやすい段取りが作業  
効率の決め手になる。



⑦ プレゼンテーションへ向かう。



⑧ グループ毎に討議する。



⑨ ディテイルにもこだわりと工夫が。



⑩ 宗像らしい展開も出てくる。

【阿部 守】



# もう一人の私

いろいろな「描き方」、いろいろな「自画像」

対象学年  
小学校中学年～中学生

「描き方」という一つの手段を強制し子どもの自由な表現を妨げるイメージが強いようです。しかし多くの「描き方」を習得してこそ、思いに合った表現方法を試し組み合わせるといった工夫ができ、自由な表現につながるのではないのでしょうか？  
ここでは、よく見ることとよく聴くことを通して、「自分だけの色使い」で自画像を描くことを目指し、顔の形を捉える力やより豊かな色彩感覚を養い付けようと考えています。



- 材料・用意するもの
- 画用紙（ハッ切） ●鉛筆 ●消しゴム ●鏡 ●コピー用紙
  - 画用紙（四ッ切） ●水彩絵の具 ●パレット ●筆洗/バケツ ●筆（数本）
  - 油性マジック ●スポンジ ●顔面用インク ●トレイ（盛り皿） ●筆（数本）
  - はさみ ●練色剤

## 『顔の中に いろいろな形と色を見つけた！』

ここでは画用紙に大きく描けるようになることや、よく見ていろいろな形や色を見つけることを重視した「描き方」を紹介します。

### ① 紙を顔に当てて鼻をつまむ

画用紙に近い大きさのB4コピー紙を顔に当てて鼻をつまんでみると、鼻の位置が一目瞭然！  
紙にすっぽりと顔からあごの先端が入るように、髪丈と確認しながら塗ると良いでしょう。



### ② 紙についた印の位置に鼻を描く

鼻の輪を描く際ながら、実顔大の鼻の大きさを意識して描いてみましょう。  
目や鼻、口などのパーツは直径4～5cmの大きなたこ紙を想像して○(円)を描き、その円の距離や直なりを描くと、位置関係がつかみやすくなります。



### ③ 眼や口も ○(円)を参考に描く

○(円)の位置に、よい形と比べながら複雑な形を観察して描きましょう。  
見えたままに描きたいという子どもには、効果的な「描き方」の一つです。



### ④ 背景をローラーで描く

四つ切り画用紙いっぱいローラーで色を塗り、輪廓を描いたりします。自画像の背景になるので、「自分らしい色や表現を見つけること」を重視させます。  
ローラーで行う活動の前半は明るい色（赤、ピンク、オレンジ、黄、黄緑、水色）を使い、ローラーでできる表現を一貫し体験させ、後半は暗い色に加え、濃い色（紺、青、緑、紫）と白も使っていいことにします。

※ここでは水性顔面用インクを使用しました。顔の具より滑りやすく、水洗いが簡単なので顔面用インクを選びましたが、指導者が扱いやすいと思われる画材を選んでください。



### ⑤ 自画像を切り取り、背景に貼って完成



八つ切り画用紙に描いた自画像を切り取り、四つ切り画用紙の背景にボンドで貼り付けたら完成です。

自画像と背景を組み合わせたら、より自分らしい雰囲気になったよ！



### ④ 輪郭や髪、口や耳を描き進める

顔の中心に近い(鼻)から描き進めることで、顔の輪廓のバランスを感じながら輪廓を描くことができます。  
顔の中心の鼻の位置と大きさが重要なので、先方に時間をかけて描き、輪郭や髪の色描きもゆっくりと進めましょう。  
また画用紙いっぱいになるまで、首や肩を描かしましょう。この時も、顔のえさや輪廓に気をつけましょう。



### ⑤ 顔に手のひらの中の明るい色を塗る

鉛筆で描いた線は油性マジックでなぞります。  
顔の色は人それぞれ異なります。まずは手のひらを見て、その中の一番明るい色を探して塗ってみましょう。  
どの色が、いか塗ってしまうときは、「ひよこ色」から始めてみてください。色にも塗ってしまうことで、白色の白色(真っ白ではないはず)を意識しやすくなります。



### ⑥ 髪に顔の色の(補色)を塗る

(補色)は「色の輪(色相環)」の反対方向にある色です。  
互いの色を鮮やかに見せたり、髪型や髪色の色に深みを加える効果があります。  
ここでは、「ひよこ色」の補色に当たる「明るい青色」を塗ってみました。



### ⑦ 顔や髪に10個の色を見つけて塗る

下地の色をよく乾かしたら、今まで以上に顔をよく見つめて多くの色を発見しましょう。  
見つけた色は少し強弱で塗っても良いし、滑らかな輪廓に使い分けでも良いでしょう。



## ★応用編★

さらに紙や粘土時間等にローラーで色を塗ったものを材料とし、はさみで自由に切って自画像とともにコラージュしても面白い表現になります。  
バスケットをばかして時間を楽しめると、よりカラフルな世界が広がります。

不思議な顔のまじりになったよ



お洒落な帽子をかぶってみたよ！  
似合ってる？



カラフルな海の中に入り込んだよ

子どもの絵には、形や色の正確さにこだわらない自由な表現による魅力があります。また一方で、見えたままに正確に描きたいという衝動もあり、幼児期から習えたと2つの方向性について、豊かな体験を通して様々な個性や表現の理解へと導くことが重要です。 [山口 真奈、松久 公樹]



# この気持ちは どんな色？

対象学年  
小学校中学年～中学生

ここでは自分の好みや性格・感情といった見ええないものを、色にたとえて表現することを重視した「描き方」を紹介しします。

- 材料・用意するもの
- 画用紙（ハッ切） ●鉛 ●鉛筆 ●クレヨン
  - 水彩絵の具 ●紙パレット（紙製） ●パレットナイフ



## ① 今日の気分の色とその（補色）を選ぶ

- ◇ 「色のわ」として小学校でもよく見かけるものですが、中学校では「色相環」として1年生のデザインで学習します。描くまで更新する前に、色水や輪の具の色で体験的に把握し、色の効果を学習する必要があります。
- ◇ 特に「色のわ」の反対に位置する（補色）は、お互いの色を引き立てあう効果があり、「印象派」の画家たちも使う技法です。
- ◇ では、「今日の気分」で色を選んで下さい。選いそうなら「好きな色」でも構いません。その色とどんなところが好きですか？
- ◇ 次に「色のわ」の反対方向にある色（補色）を選びます。



## ② 選んだ2色と組み合わせる色を作る

- ◇ 2つの色ができたら、その2つの色の中間の長さそうな「仲良しの色」を選びましょう。似た色の仲良しさんでも、一緒にいるとカッコ良さそうな色でも構いません。
- ◇ 決まったら、また「仲良しの色」を選びます。



## ③ ペインティングナイフだけで描く

- ◇ 4つの色が決まったら、紙パレット（または紙皿）に選んだ絵の具を多めに置いて、ペインティングナイフだけを使って顔を描きます。
- ◇ 下層色がある方が抜ければ縦横を下書きをしてから、大丈夫そうなら思い切り顔の具で描き始めましょう。



この「描き方」を学んだ子どもたちは、顔の中にいろいろな色を見つけたら面白がることのできるでしょう。また、個性的な色彩で表現された顔を観る際にも、「〇〇な気持ちを表しているのかなあ…」という疑問が抱くことができるようになります。

※は、常識や社会性を身にまとう大人こそ身に付けたい感性といえるのではないのでしょうか？

【松久 公嗣】

# 見えないから 見えてくるもの

対象学年  
小学校中学年～中学生

ここでは正確に形や色を表現することで伝える具象的な表現に対して、抽象表現や個性の探求へとつながる体験重視の「描き方」を紹介しします。

- 材料・用意するもの
- 画用紙（ハッ切） ●アイマスク（巻無し）
  - クレヨン（またはクレパス）…黒、白は使いません



## ① 約束 この約束を守らせることが成功の鍵！

- 1: 二人一組で活動する。一人がアイマスクをつけて顔を描き、もう一人はクレヨンを塗るなどの補助を行う。
- 2: 補助者は顔の中心だけ教えてよい。（物は一度触れない）
- 3: アイマスクをつけたら「終了」という言葉で決まるといえない
- 4: 残り1分になったら、顔のどこかに名前を書く。



## ② アイマスクをつけて顔を描く

- ◇ 自身の顔を思い出しながら、目隠しをした状態で自身の顔をクレヨンで描きます。
- ◇ 子どもたちの様子を見ながら、7分から10分程度で行います。
- ◇ 思いの外出来たら、名前を書くように声をかけます。
- ◇ 全員が名前を書き終えたら「終了」の合図をします。
- ◇ しばらくは子どもたちの顔で盛り上がりませう。落ちついたら、交代して繰り返します。

## ③ まとめ

- ◇ 子どもたちは勝手に作品を見せ合って鑑賞を始めるでしょう。新しい事や気になる事は見たり聞いたりしてなるものですね。
- ◇ 顔の色や動きなどに子どもの個性が反映していませんか？
- ◇ 大団だったり興奮したり、性格が表現されているでしょう。
- ◇ 自身の名前もしっかりと書いている子が多いはずです。
- ◇ 小さな顔ほほより大きな顔が得意な子が多いのですが、毎日書くことで目隠しして書きながら上手に上達しているのです。
- ◇ 上手に描くことだけが表現ではない！！
- ◇ 上手に描くには、毎日練習すれば間違いなく上手になる！！



この「描き方」は世界的に活躍する木版画家、河内成幸先生が福岡教育大学で指導された授業を参考に、小・中学校用にアレンジしたものです。（真顔）に見える表現が、実は描く人の内面から湧き出た個性だということを体験的に知ることもできる内容です。

具象的な描写で感動を伝えることが得意な子がいれば、色や形を特徴的に伝えることが得意な子もいます。正確な形や色といった（情報）だけでなく、何かにしみ出てくるような（感情）や（能力）があるはず。大切にすべき個性とは何か？ 子どもたちと一緒に考えてみませんか？

活動だけで終わらずに、色々な個性や表現の大切さを伝えて終了して下さい。 【松久 公嗣】

# ぬってけずって スクラッチ

対象学年  
小学校中学年～中学生

コリコリけずって絵を描く

白い紙にペンや筆で線を描くのも結構けど、くらいい線をとがとがの線でコリコリけずって描く絵もある。それが、スクラッチ。ひたすらコリコリやりながら、かたちや色をけずり出して、絵を描いてみよう。



- 材料・用意するもの
- ケント紙（または画用紙） ●絵の具一式 ●みつろうワックス ●ポロ布
  - アクリル絵の具（最終は塗色） ●画板ローラー ●ニードル、クナイなどけずる道具
  - フィキサチーフ（定着スプレー）

## くらいところからどんな絵がでてくるかな？

スクラッチで描く絵は、基本、くらい画面から、かたちや色をけずり出しながら絵を描いていく。そんな場面を思い浮かべながら、描く絵を考えよう。夜だったり、海の底だったり…。いろいろなんで、わくわくするね。

## ① ケント紙にあざやかに色をぬろう

- ◇ 用紙は、表面がなめらかで後からけずりやすいワント紙を使います。もちろんいつもの画用紙でもOK。
- ◇ 最初に、用紙にあざやかに色をぬります。表面をくらくらして、けずっていくので、出てくる色は「あざやか」なほうがよく見えます。
- ◇ 描く絵を考えたら色をぬってもいいし、描く絵を考えずに色遊びを楽しみながら色をぬってもいいです。



## ② 絵の具がかわいたら、みつろうワックスをぬる

- ◇ 絵の具がかわいたら「みつろうワックス」をぬります。ハンドクリームみたいになった「ろう」だと感じてくたさい。それをポロ布につけて、用紙全面にぬります。この「ろう」の役割のおかげで、あとから顔の具をぬりつぶすアクリル絵の具が、けずると擦る擦る。はがれるわけです。ぬったかどうか、ぱっと見てわかりにくいので、ぬり忘れに注意！



●みつろうワックス…みつろうの固まり「ろう」を成分としているので「みつろう」といいます。塗るとよく削れてくたさい。固まるとよく削れてくたさい。

## ③ アクリル絵の具で用紙をめりつぶす

- ◇ みつろうワックスが少し落ちたら、今度はアクリル絵の具で用紙全体をめりつぶします。画筆ローラーを使って、さーっと、めりつぶしてください。
- ◇ はじめから描く絵を考えて下地の色を決めた場合は、下地の色が見えるようにに削り出して、けずる場所の見当がつくように、めりつぶしてください。



## ④ さあ、思うぞんぶんスクラッチ！

- ◇ アクリル絵の具がかわいたら、思うぞんぶん、コリコリコリコリ、スクラッチを楽しみながら絵を描いていきましょう。ニードル、クナイ、そのほかアクリル絵の具をけずるとれるものをいろいろとまてて描いていきましょう。
- ◇ けずりまちがいは、アクリル絵の具で修正することも可能です。
- ◇ スクラッチした絵に、さらに筆を加えてあげるともできます。



## すてきなスクラッチギャラリー「まほうの時計」



子どもも大人も、あまり経験のない「けずって描くスクラッチ」を描くことを新鮮に感じます。大牟田市立米生中学校の山下高也先生からヒントをいただいた授業です。 【佐藤 浩仁】



# クレヨンを作ろう

対象学年  
小学校低学年～

誰もが一度はクレヨンで描いたことがあるはずですが、そんなクレヨンが自分で作れるのです。材料となる生の色（顔料）を見たり、実際に作ったクレヨンが輝くことに驚いたり、子どもの感性をくまぐまぐま育てていきます。自由に型を成形して、クレヨンの素を流せば《オリジナルクレヨン》の完成だ！



### 材料・用意するもの

- ミットロウ
- キャンデリラワックス
- ひまし油
- 顔料（各色）
- スティック棒
- 計量カップ
- 計量スプーン
- ホットプレート
- 粘土板
- 型（材料と道具（粘土土、粘土土、粘土土、シリコン型等）

### どんな形と色のクレヨンがいろいろ



## ① 材料を混ぜ合わせて溶かさそう

- ◇ 基本的な材料は、色の粉である顔料と蝋です。これを混ぜ合わせて溶かすとクレヨンができます。さらに指さ心地の工夫として、蝋の種類を変えたり油を混ぜることで硬さや滑らかさの異なるクレヨンを作ることができます。
- ◇ 今回は黄色と指さ心地に合わせた配合でクレヨンの素を準備しました。



カップに入っているのは黄色の顔料のクレヨンの素、キャンデリラワックス、キャンデリラワックス、5g、顔料（バーナムレッド）の1.5g、ひまし油 1g



別の顔料の色や油の種類を変えます。ホットプレートを使うときは十分な換気や火災予防に注意してください。注意：顔料は、温度が高くなると燃える可能性があります。顔料の取り扱いには、適切な注意が必要です。

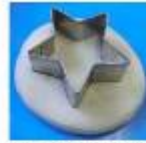


ホットプレートで溶かす。顔料の色や油の種類を変えます。ホットプレートを使うときは十分な換気や火災予防に注意してください。注意：顔料は、温度が高くなると燃える可能性があります。顔料の取り扱いには、適切な注意が必要です。

\* キャンデリラワックスは、キャンデリラ属からとれる蝋です。シリコン製のシリコン型は、おいておくと変色することがあります。

## ② どんな形のクレヨンがいいかな

- ◇ 既製のクッキー型やシリコン型を利用することができます。
- ◇ 自分でオリジナルの型を作るなら、粘土工や木工で制作できます。



クッキー型の型を粘土で固定



花柄のシリコン型



粘土土の型に蝋を加えて成形。シリコン型を流して成形

## ③ クレヨンの素を型に流して冷まさそう

- ◇ クレヨンの素が逃げたら型に注ぎ込みます。逃げた場合は、型を冷ましてから注ぎ込みます。
- ◇ 幼児や低学年が参加する場合は、型取りだけを済ませて、注ぎ込み作業を教員が行ってほしいです。



型取りが終わった後



注ぎ込み後



注ぎ込み後、冷ましてクレヨンの素を冷ます

## ④ 色々なクレヨンたち

- ◇ 個性を工夫することで、造形の要素も取り入れることができます。
- ◇ クレヨン作りという題材から、色や造形性やデザイン性に関心があると、教材としての自由が広がることでしょう。



カラフルな色と自由な造形



シリコンの型を利用したお菓子の型のようなクレヨン



粘土土で覆って型取った



出来上がった色とりどりクレヨン。そのリアルさが不思議

材料や道具の準備が必要なので、なかなか気軽に作るというわけにはいきませんが、できあがった面白いクレヨンを置いたり取り出す体験は特別なものです。作ったクレヨンを使ってみると、実際に描けるか不安だった気持ちが驚きと笑顔に変わっているでしょう。

【加藤 隆之】

# 木の匙をつくろう

対象学年  
小学校5年～

## バターナイフづくり

自由な発想で新しい形やものを生み出すものづくりではありません。形を想定し、最終品たちが使うための道具をつくるという、単純で素朴なものづくりです。素材と向き合い、道具を使って自らの手で作り上げることは、自ら考え、感じることを必要とするとても貴重なことです。

### 材料・用意するもの

- 山桜の板
- 油
- 切り出しナイフ
- 丸刀
- 紙やすり#100
- 紙やすり#120
- 砥石（えあぶら）
- ウエス
- 参考作品

## バターナイフづくり！

シンプルで動きのよい形を提案。つくりやすいこと、使いやすいこと、愛着が持てることを考慮したバターナイフ。木工作家である三谷隆二氏がつくっているバターナイフを目標に、完成度を上げることで得られる充実感や自信、つくったものに対する愛着心を持つ。



## ① 山桜の板に木取りをして伐り抜こう

- ◇ 長さ 6cm、幅 20mm、横 90mm の山桜の板に製板と鉋を使って木取りをする。厚さがこれ以上になると、山桜は割れやすいため制作が困難になる。一つの板に二つ作れるようにする。
- ◇ 磨付けた板より、若干外側を削るように意識しながら、切っ先と電動糸鋸で切り抜く。電動糸鋸は、切っ先を固定することがコツ。



## ② 切り出しナイフで形をつくる

- ◇ 切り出しナイフの注意事項。利点手でナイフを持ち、材を持つ手の親指でナイフの背を押しながら削る。また、バターナイフの構造を削り壊れることから注意。
- ◇ 刃目に注意して削る。刃目にきたら刃先が刃に削れる。持ちづらくなる場合は止めを使うと削りやすい。
- ◇ 削る方向をよく見ながら丸みや薄さを出していく。



## ③ 紙やすりで形を整える

- ◇ 80 番の紙やすりで始めて形をつくる。へら部分を磨くには紙やすりが有効。
- ◇ 180 番の紙やすりで木肌を整えて傷をなくす。指先で押しながら形を確認する。少しでも凹凸を感じたら、逆方向にこの段階で整える。
- ◇ 320 番の紙やすりで木肌をきめ細かくし、肌荒れをなくする。



## ④ 荏油を塗って完成

- ◇ 320 番の紙やすりで磨かれたスプーンを水洗いする。乾くとスプーンの表面が半乾きになるので、再び 320 番で磨く。これを 3 回程度繰り返す。
- ◇ 荏油をしみこませたウエスでスプーンを拭き上げる。荏油をしみこませることで木肌を保護・保護できる。
- ◇ 完成！



（千尋木 酒行）





## 5 アンケート調査

全ての研修が終了し最適化された教材をまとめた教材集を全教員に配布するとともに、研修への参加の有無に関係なく、全教員を対象としたアンケート調査を実施した（平成26年3月）。

各表には研修実施校を A~F で表記している。表内の数値は学年別に集計されたものが多かったため、参考程度に記載している。ここでは、全体の偏り具合を中心に個別に記載された意見について考察する。

### (1) アンケート集計

#### ■回答者の教員勤務年数

教員年数	A	B	C	D	E	F	
1-3年	1	1	0	0	1	2	5
4-10年	1	3	1	3	1	2	11
10-20年	0	2	2	0	1	0	5
21年以上	5	7	1	3	1	4	21

#### ■回答者の担当学年

担当学年	A	B	C	D	E	F	
1	0	0	0	1	1	1	3
2	1	1	0	2	1	1	6
3	3	1	1	1	1	1	8
4	0	3	1	0	1	1	6
5	0	2	1	2	1	0	6
6	0	1	1	2	1	1	6
その他	1	1	0	0	1	1	4

質問① これまで、図工室を活用されていましたか。

	A	B	C	D	E	F	
ほとんどの授業で活用	0	1	0	2	0	1	4
ある程度活用	3	5	3	1	5	4	17
あまり活用していない	3	7	0	0	0	2	12
全く活用していない	0	1	1	2(1)	0	0	4

#### ※活用できなかった理由

- 低学年は移動に時間がかかる。      • 移動するのに時間がかかる。
- 有効活用の方法が分からないから。
- 図工室の使用割（使用できる学年割り当て）が少ない。
- 全学年 15 クラスが使用するには、時間が重なってしまう。
- 木工以外は教室の方が授業しやすかった。使用割も決まっているので。
- 教室の方が移動時間がなく、道具（画用紙など）の持ち運びがない。
- 使用する必要がなかった。      • 教室で間にあうので。      • 教室でできる。
- 普通教室でも可能な題材・授業がある。図工の備品が充分でない。
- 現在 1 年生担任で、教室より遠く、またテーブルも高いので。      • 低学年のため必要がなかった。

- 特支だから、あまり機会がなかった。
- 図工は担当の先生にお願いしていたため。
- 兼務の先生が毎回活用されていました。私自身は図工を受け持っていません。

質問② 今回の図工室整備は授業を行うにあたって有効か。

	A	B	C	D	E	F	
とても有効	5	4	0	2	5	5	21
ある程度有効	2	10	2	4	0	3	20
あまり有効でない	0	0	1	0	0	0	1
全く有効でない	0	0	0	0	0	0	0

※有効または有効でない理由

- 環境の整備は大切と思うから。      • 整備した方が使いやすいため。
- 道具類がきちんと整備され、使い方も指導頂けたので。
- 活動しやすい。参考作品がある。友だちの作品を見て交流できる。
- 教育大の先生が関わっていただくことで、職員が図工室整備を意識することにつながった。
- 図工室を使った時に机が整備されていて助かった。
- 子どもたちの活動意欲を高めることができる。
- 環境が良くなり、子どもたちも気持ちよく授業に取り組める。
- 児童・生徒が作業しやすい環境になったから。      • 整備されていると使いやすい。
- 児童に見本としての作品を作成して飾ったり、整備したりして、きれいな図工室になった。
- テーブルに板を貼っただけで気持ちよく使えるようになった。
- 材料や道具等もどこにあるのか分かりやすく、使いやすい。
- 児童の作品（途中のもの）が、整理しやすくなった。      • 作品棚ができて良かった。
- 説明がなく知らなかった。

質問③ 今回の研修制度（勤務する学校の図工室で行う）は教員にとって有効か。

	A	B	C	D	E	F	
とても有効	5	4	0	3	5	5	22
ある程度有効	1	8	2	3	0	3	17
あまり有効でない	0	0	1	0	0	0	1
全く有効でない	0	0	0	0	0	0	0
不参加のため不明	1	2	1	0	0	0	4

※有効または有効でない理由

- 知らないことが多く、勉強になったから。      • 知らないことがたくさんあるから。
- どのように授業をしたら良いかわかった。      • 専門の先生から教えて頂けるので。
- いろいろな教材・教具を紹介して頂いたからよかった。      • 教具教材の活用法が分かったから。
- 自校の図工室活用のヒントを得られるため有効。
- なかなか”図工”研修に行く機会がないものにとっては有効。
- 実際に活動しながら研修できたので、非常に勉強になった。
- 実際に図工室の利便性を感じることができる。
- 図工室の整備も、図工の研修についても意識付けを行うことにつながった。
- 自分がやってみることで、図工の楽しさが分かった。こんなこともできるのかと参考になった。
- 特に大島の場合、来て頂けたので良かった。

- わざわざ他の場所に時間をかけて移動しなくて良かったから。
- 説明がなく知らなかった。
- 研修があることを全教員に周知して行く。希望する内容について指導・研修を受けると良い。
- 教員にとってプラスだと思いますが、事前の情報がもっとあると良かったのでは？

質問④ 今回の研修内容は教員にとって有効か。

	A	B	C	D	E	F	
とても有効	4	4	0	3	5	4	20
ある程度有効	3	8	1	3	0	4	19
あまり有効でない	0	0	2	0	0	0	2
全く有効でない	0	0	0	0	0	0	0
不参加のため不明	0	2	1	0	0	0	3

※有効または有効でない理由

- 授業後の教室での先生のお話は、とても参考になった。
- とても楽しかった。      • 内容が非常に分かりやすかった。
- 1回だけではなく、数回にわたって関わって頂けたので、職員の意識を継続できた。
- 全教員が参加できるとより良いと思える。
- 造形あそびの取り組みが高学年になるほど少なくなっていたが、道具（ドリル）の使い方を知ったことで、子どもへの指導ができ、はばが広がった。
- 知らないことがたくさんあるから。      • 自分が分かると指導しやすい。
- 研修内容を授業に活かすことができる。
- 指導の参考になった。      • どのような授業をしたら良いか分かった。
- 子どもたちと楽しく作品作りができました。
- 実際につくることができ、図工の楽しさを改めて感じる事ができた。
- 技法等で新しく体験した内容があったから。      • 様々なアイデアを研修できたから。
- 説明がなく知らなかった。

質問⑤ 今後、図工室を活用されますか。

	A	B	C	D	E	F	
ほとんどの授業で活用	2	1	0	2	5	2	12
ある程度活用	5	15	4	4	0	6	34
あまり活用しない	0	0	0	0	0	0	0
全く活用しない	0	0	0	0	0	0	0

※活用したくない（できない）理由をご記入下さい

- 必要に応じて。      • さらに備品、使い勝手が良くなるとよい。
- 何年生を担当するかで異なります。
- 内容によっては活動しやすいから。
- テレビ・パソコンを用いた鑑賞ができない。

質問⑥：本プロジェクトにおける効果について

⑥-1 児童への教育効果

- 広い図工室の机や棚で作業できた。友だちとの交流がしやすい。
- 教員が研修を積み重ねれば、児童に効果が出る。

- これまでにない造形あそびを体験することができた。
- 用具の整理、充足され、環境面での充実。      • ものがたくさんあるという事は、とても有効である。
- 教具が豊富にあり意欲的にできた。
- 粘土等、道具を揃えてもらったので、とても便利だった。      • 粘土がたくさんあって活動が広がった。
- 実際には学年の学習内容（カリキュラム）との関係もあり、あまり生かせなかった。
- 子どもたちの作品を保管できるようになりました。他学年の作品も気になるようです。
- 図工室が整備され、お手本となる作品が飾られているので、非常に子どもたちも興味関心を持って学習に臨むことができた。
- 図工の楽しさが分かった。

## ⑥-2 教員への効果

- 指導力の向上。図工に対する意欲・関心の向上。
- 他学年の作品交流。
- 教材研究や教材開発のヒントを得ることができた。
- 配られた冊子が見やすく、実践してみたいと思った。
- 造形あそびを啓発することができた。
- 用具の扱いの理解。
- 研修では道具の選び方・使い方はじめ、図工科学習のあり方についても学び、よい学びの機会となりました。
- 道具や材料の使い方を詳しく教えて頂き、子どもたちへの指導に生かしたいと考えることができました。
- 教員のスキル向上。図工に対する興味の向上。
- 実際の教室で研修ができて、効果的だった。
- 今後の知識（技能）としてはよかった。
- 新しい知識を得ることができた。
- 買っていただいたものを活用する教材を考えることができた。
- 指導過程や声かけ等、実際に参観できた。
- 図工室が整備され、お手本となる作品が飾られているので、具体的に「このように」と作品を指し示しながら授業を進めることができた。
- 研修で実際に授業に関わる作品をつくったので、教材研究にもなり、授業構想力も高まった。
- 図工の授業の仕方がわかった。

## ⑥-3 その他の効果

- 図工室の整備のきっかけ。
- 教具・教材が揃った。
- 図工室の活用率が上がった。

質問⑦：本研修制度に係る改善（問題）点について、具体的な改善案などあれば、ご助言願います。

### ⑦-1 研修時期について

- 夏休みでよかった。      • 夏休みの時期がいいと思います。      • 夏休み中心でよい。
- 夏の暑い時期でしたが、よかったです。
- 色々なことを考えると、やはり夏期休業中が時間的にはとりやすいかなと思います。
- 夏休みでなければ実施できないと思います。
- 適当だったと思います。ただ、本年度は防災教育の中間報告会に向けての指導案作成、出張等と重なり、当初の予定の参加人数より少なくなった。日程調整が夏休みと言ってもなかなかむずかしい。
- 多学年にわたって、計画的に進めてほしい。

## ⑦-2 研修内容について

- 2学期の県展（描画・版画）に向けての技術指導を。
- 午前午後で、工作と図画に分けて研修があればと思いました。
- 多学年にわたって、計画的に進めてほしい。
- 担当以外の教員も参加すればよかったと思う。
- 事前に内容を教えて頂くと助かります。
- 今回の内容は学校側からの要望だったが、ためになった。
- 教材・教具の開発のアイデアが知りたい。
- 非常に参考になりました。

## ⑦-3 教育大学との連携について

- 前みたいに支援教員みたいな人が来てくれると良いと思う。
- 日頃、研修しにくい教科なので、連携して頂くと大変助かります。
- 学生が支援してくれると、より有り難いと思う。
- 学生を通してでもいいので、連携システムをより一層確立していくといいと思いました。
- よいと思う。できればきちんと説明があった方がよいと思う。
- とてもありがたいです。時間の調整等が難しいですが、実際に授業に入って頂いたことも良かったです。
- 年1～2回とかではなく、美術教育の交流研修という観点から、日常的に交流ができることが望ましい。
- わざわざ学校まで来ていただいてありがたい。
- 教育大との連携を今後もお願いしたいという教員からの要望があり、現場と教育大の連携をすることが可能になる。
- 非常にありがたいです。

## ⑦-4 予算について

- 予算はできるだけ多い方が活動（研修・整備等）がやりやすい。
- あればあるだけ良いが、今回の予算でも充分である。
- 次年度もこのようなプロジェクトがあるといいと思う。予算が組まれていてありがたい。
- 学校の予算は少ないです。

## (2) アンケート結果の考察

アンケートでは、事業に対する好意的な意見が多く寄せられており、本研修内容が好意的に受け取られていることがわかる。しかし、本事業の本質を理解し教育実践に活かそうとしている教員は一部に限定される。多忙な教員にとっては、本事業による研修や研究授業も、数多くある研修や研究授業の一つとして認識されていたように思える。今回は、通常の勤務で活用するあるいは目にする図工室が整備されたことで、各教員の意識には残っているはずである。また、研修の成果を確認・評価するための授業実践では、学習環境の整備等適切な設定がなされていた。これらのことから、図工の教育効果を認識している教員には、さらに教育力を向上させる効果があったと思えるが、もともと日常の中に課題を発見しようとする意識の薄い教員にとっては、本事業のような研修を継続して提供し、意識改革を図ることが必要であると分析する。

## Ⅲ 連携協力による研修についての考察

### 1 連携を推進・維持するための要点

本事業では、実際に教員が勤務する学校現場の学習環境のうち、図工室という限定した空間を大学教員と協働して課題を発見し、解決するという新たな研修方法を提案した。当初は肉体労働的な内容を含む図工室整備について気ののらない様子も伺えたが、共通認識を得ることが出来るようになってからは、本事業の主旨を理解した発言や行動が見て取れるようになった。

今回の事業は各教育委員会の校長会を通して説明がなされ、管理職主導のなかで研修を行う学校が多数あった。その結果として、研修の意義を的確に捉え学校全体の研修として展開することができた学校と、トップダウンとして指示される中で研修を迎えた学校のあいだに、研修に対する教員の意識差が顕著に表れることとなった。アンケート調査でも事前の主旨説明を求める意見が複数見られるが、この意見が多い学校が前述するようにトップダウンとして指示される学校とリンクしている。しかし、研修①（事前協議）において、大学の担当教員から本事業の研修内容や主旨説明は繰り返し行われていることから、この調査結果は、各校において教員が研修に関する内容や日程を知る時点での第一印象が、研修に対する教員の意欲や意識を決定している可能性を示唆するものと考えられる。日常的に接する管理職との関係性の重要度は大きい。

また、アンケートにもあったように、学校現場で図工室の学習環境改善に使用できる予算はほとんどない。事前協議と図工室の現状を確認する中で、教員の肉体労働による手作りの備品製作および整備による予算削減を実行しても、効果的な図工室の整備には一定の備品が必要であり、その整備と研修内容の連動が不可欠であるという結論から、各校 5 万円を図工室環境整備費用として実施計画を作成した。この金額は、現在教育委員会と継続した研修の実現に向けて必要な予算として、恒常的な予算化に関して協議するための目安として提示している。

大学を卒業して一般企業に勤める者は、少なからず各企業の利益追求や企業理念に即したマネージメントを学ぶが、教員におけるマネージメントスキルの習得は、具体的な学習場面の少なさも影響して、急成長を遂げることは期待できない。また、担任として各教室を管理する能力と意欲は高まるが、共通的な空間となる図工室について学習環境を改善しようと試みる教員はほとんどいないのが現状である。

しかし、今回の事業によって、このようなスキルを習得できる機会と一定の予算を提供することで、劇的に学習環境が改善され、その場を活用した研修体験が授業を通して児童の学習に効果的であることが確認できた。日常的に学習環境の改善に関わろうとする意識を持つには継続した体験と柔軟な発想が必要であるが、多様な教材や画材、備品に関する知識や体験が必要となる図工科の教材研究においては、一定の予算を確保したうえで、試行錯誤を繰り返すことが重要である。体験・経験していないものは児童を含めた他者にも伝えることはできない。

様々な教育問題に対応しなければならない教員は、精神的にも時間的にも、予算的にも余裕を持ってこそ、その能力を発揮することができると思う。本事業名にもあるように、実効性と継続性を保証することが学校現場の教員を支援し、教育実践力を蓄えるための必須条件ではないだろうか。現在、教育大学は地域貢献を中心とした学校現場との連携を強化している。

今後は目に見える改善を図るための予算の確保について教育委員会と協議し、本事業で提案した研修方法を継続して展開することが重要である。

## 2 連携により得られる利点

本事業によって、教育大学は小学校現場の様々な課題に対面し理解を深めることができた。学校現場の声としても大学と協働する利点は数多くアンケートに記載されている。しかし、自律的・自主的な研修に向けた意見は少なく、受け身に終わっている点が残念である。本事業の継続によって小学校教員の意識改革と大学教員の現場理解を深めることができるとすれば、地域に貢献する教育大学のミッションを遂行し、直接的に子どもと関わる教員の教育力向上が見込まれる。現職教員の研修をコーディネートする教育委員会が中核となって、予算的な課題を解決して大学との協働を進めることで、互いに本音を語ることのできる場の設定が可能となり、学校現場の学習環境の改善が確実なものとなる。

図工のような教科の教材研究はもともと教員に負担の大きいものである。定期的に教材集を追加できるような連携体制を組むことで、現代社会が求めている教育の力を支援し提供できるようになることが、日本の教育再生の一步となるだろう。

## 3 今後の課題等

本開発プログラムに関しては、小学校現場における管理職から教員への情報伝達が重要な課題である。アンケートにもあるように、複数回個別に研修実施校をまわって説明したにも関わらず、事業の主旨を理解して臨んだ教員は少なかった。教員の意識改革が必要であればその点から開始しなければならない。小中一貫教育の実践でもネックとなるのは小学校・中学校の教員の相互理解と情報共有である。小規模から中規模の小学校では図工室の使用時間割が適切に生まれ情報も共有されているが、大規模校となると使用時間割に無理があることで、図工室の活用に対する意思が薄まっていることも問題である。

しかし、本報告書で紹介した宗像市立赤間小学校では、1学年4～5クラスの大規模校であるにも関わらず、適切な図工室管理が継続して維持されていた。これは一昨年度まで2年間にわたり別プロジェクトで本学が図工科の専科教員を配置していたことが影響している。それまでは他の小学校と同様に、図工室はほとんど活用されていなかったが、専科教員が配置され、図工室の学習環境を改善するとともに使用時間割を管理する担当者ができることで、図工室を活用するメリットが広く他の教員に浸透していったことによる。

基本的に教員は、担当するクラスの児童にとってプラスとなることは進んで行うものである。図工という限定された空間や教科の特殊性が、善良な教員のプラス思考に壁を作っているとすれば、専門家と称する大学教員が壁を取り払うきっかけを提供し、教員の教育実践力向上を支援する教育委員会が、予算的な課題の払拭に動くことで継続的なプログラムが機能する。

児童にとって有効な手段であることが判明した以上、小学校教員、大学教員、教育委員会等がそれぞれの特徴を活かして協働することで、過度の負担なく維持できるプログラムを構築したい。

## IVその他

---

### 1 キーワード

図画工作 図工室 教材 教具 参考図版  
学習環境 教材開発 教材研究 最適化 専科教育  
大学と小学校の協働 学校内研修 自律的研修  
課題発見能力 課題解決能力 備品管理  
学び続ける教員 継続性 教材集

2 人数規模 D. 51名以上（補足事項：各校9～24名×6校）

3 研修日数 D. 11日以上（補足事項：各校4または5日×6校）

No	小学校名	学級数（学校規模）	研修参加者数	研修日数
1	宗像市立赤間小学校	31学級	19名	5日
2	宗像市立日の里西小学校	15学級	9名	5日
3	宗像市立玄海小学校	7学級	6名	4日
4	宗像市立大島小学校	6学級	9名	4日
5	福津市立津屋崎小学校	22学級	29名	5日
6	福津市立勝浦小学校	5学級	9名	4日

### 【問い合わせ先】

国立大学法人 福岡教育大学  
連携推進課 川崎由紀江（事務担当）  
〒811-4192 福岡県宗像市赤間文教町 1-1  
TEL 0940-35-1238

宗像市教育委員会  
指導主事 正路澄代  
〒811-3492 福岡県宗像市東郷 1-1-1  
TEL 0940-36-5099

福津市教育委員会  
指導主事 内藤博愛  
〒811-3304 福岡県福津市津屋崎 1-7-1  
TEL 0940-52-4914